



伊集院高校演劇部の舞台「See you tomorrow」(ドキュメンタリー映像「あしたよなあ—不時着した特攻隊員—」より)

本当の意味で言い合える 「あしたよなあ」 特攻隊員の生死の軌跡 平和の尊さを訴える

ドキュメンタリー映像が
「地方の時代」映像祭で奨励賞受賞

松野良一教授
ゼミ

みのり
田畑美徳さん(国際情報4)制作



安部正也少尉と安永克己さん(ドキュメンタリー映像「あしたよなあ―不時着した特攻隊員―」より)

国際情報学部^{みのり}の松野良一教授のゼミでジャーナリズムについて学んでいる田畑美徳さん(4年)制作のドキュメンタリー映像「あしたよなあ―不時着した特攻隊員―」が「第44回地方の時代」映像祭(NHK、日本民間放送連盟など主催)の市民・学生・自治体部門で奨励賞を受賞した。第二次世界大戦末期、鹿児島県の小さな島に不時着した日本軍の特攻隊員の生死の軌跡を、島の人々や特攻隊員が飛び立った鹿児島県南九州市の知覧特攻平和会館の関係者らに取材を重ね、38分の映像作品として発表した。

再出撃望んだ特攻隊員に 手を差し伸べた中大卒業生を知る

「あしたよなあ」は、薩摩半島の南西約50キロに位置する黒島(鹿児島県三島村)の人々が別れの挨拶に交わす方言で、「あした会いましょうね」という意味。次の日に会う予定がなくても、二度と会えないかもしれない関係でも、別れ際に伝え合う言葉だという。

田畑さんは「特攻隊員に『あした』はなかった。若い世代が平和と戦争を語り継ぎ、本当の意味で『あしたよなあ』と言葉を交わし合える世の中にしていけないといけな」と、ドキュメンタリーに込めたメッセージを語る。

松野ゼミの先輩たちが制作したドキュメンタリー映像に刺激を受け、自らもテーマを探す中で、黒島の存在を知り、興味を抱いた。第二次世界大戦末期、黒島には特攻隊の10

人の遺体が流れ着き、4隊(4機)6人が不時着した。

不時着後、再出撃を望んだが、手漕ぎの舟では本土に戻れないと島の人に反対されていた安部正也少尉(明治大卒)に手を差し伸べたのが、中央大卒業生の安永克己さんだった。安永さんは1923年に鹿児島市で生まれ、中央大学専門部商業科を1943年10月に繰り上げ卒業した。船の沈没で召集令状が鹿児島に届かず、家業の牧畜業を手伝うため黒島に滞在していたという。

特攻隊員の慰霊碑建立 高校生の舞台に心震える

1945年5月、安永さんが漕ぎ手を務め、2人は2日間の航海で本土まで渡り切った。安永さんの存在をきっかけに黒島での出来事に興味を抱き、制作を始めた、ドキュメンタリーのナレーションで田畑さんは説明している。

知覧特攻平和会館の学芸員への取材や、テレビ番組ディレクターとして取材で黒島を訪れた小林広司さんが特攻隊員と黒島の人との交流を記した著作「黒島を忘れない」(2015年、西日本出版社)の内容、小林さんの妻、ちえみさんへの取材などをもとに、多くの関係者から丹念に話を聞いた映像がドキュメンタリーの中で紹介されている。

不時着で大やけどを負い、島の人から手厚く介抱された柴田信也少尉(法政大卒)のもとを訪ねた安部少尉は、島にやけどの薬がないことを知る。本土の飛行場に戻った安部少尉はその後、やけどの薬やチョコレートなどを詰めた「柴田信也少尉殿」宛ての荷物を黒島上空から投下し、南方へと飛び去ったという。

安部少尉の正式な再出撃の記録は確認できていないが、荷物の投下地点には、安永さんが2004年に建立した慰霊碑



除幕式で挨拶する安永克己さん



制作プロデューサーの田畑美徳さん



④⑤ ドキュメンタリー映像「あしたよなあー不時着した特攻隊員ー」より

が立ち、慰霊祭で手を合わせる安永さんの写真もドキュメンタリーに残されている。

特攻平和観音像が建立された2004年の翌年から、黒島特攻平和祈念祭（慰霊祭）が開かれ、田畑さんは2023年5月、参列のため実際に黒島を訪問。このとき、隊員と島の人々の交流を描いた鹿児島県立伊集院高校演劇部の生徒の舞台「See you tomorrow」を見て、激しく心を揺さぶられる。

あしたを歩む私たちー

「戦争を知らない高校生が表現していること自体に驚きがあった。表情や声などが迫ってくるような演技で、初めて当時の人の息づかいを感じられた」と、衝撃を振り返っている。

知覧特攻平和会館では、黒島上空が特攻隊の飛行ルートの一つとなった理由や、不時着した6人は全員が生きて本土に戻ったことなどの説明を、学芸員から受けた。不時着した特攻隊員がどのような思いを抱いていたのかに関心があつた田畑さんは、「一度は死を覚悟した特攻隊員も、再出撃を望んだ人、生への執着が生まれたと証言した人など、抱いていた思いは違う」と話している。

ドキュメンタリー映像の結びの場面では、島を去る船に向かって、「あしたよなあ」と船着場から声を上げる人々の姿が映る。そして、田畑さんの語りが続く。

「はかなくも、あしたを生きてできなかった特攻隊員の思いをかみしめ、私たちは、あしたを歩んでいきます」

黒島での特攻の現実 未来へ語り継ぐ高校生の思いを描く ドキュメンタリー映像 「あしたよなあー不時着した特攻隊員ー」

第二次世界大戦末期、中央大学 OB 約 60 人が特攻作戦で戦死した。特攻と中央大学の関係の研究を進めていた松野ゼミ生、田畑美徳さんは2023年4月、特攻隊員10人の遺体が流れ着き、6人が不時着した鹿児島県三島村の「黒島」の存在を知る。黒島は薩摩半島の南西約50キロに位置する周囲約15キロの小さな島で、今は約180人が暮らしている。

ドキュメンタリー映像の制作は、田畑さんが再出撃を望む特攻隊員に手を差し伸べた中央大学卒業生、安永克己さんの存在を知ったことをきっかけに、不時着した特攻隊員がどのようなことを考えていたのだろうという疑問からスタートした。

特攻隊員6人が島の人々と交流する中で生と死に向き合う現実と、鹿児島県立伊集院高校演劇部の生徒たちが黒島での出来事を一生懸命に舞台上で表現し、未来へ語り継ごうとする姿、思いなどを描いている。

〈制作協力〉鹿児島県三島村役場 小林ちえみ
鹿児島県立伊集院高校演劇部
知覧特攻平和会館

〈資料提供〉小林広司「黒島を忘れない」(西日本出版社)
知覧特攻平和会館
アメリカ国立公文書館
中央大学資料館事務室

〈制作補〉山崎滉大(国際情報学部4年)

〈制作プロデューサー〉田畑美徳 征矢佳真(国際情報学部4年)

〈制作統括〉松野良一(国際情報学部教授)

〈語り・監督〉田畑美徳

〈制作著作〉中央大学国際情報学部 松野良一ゼミ

(敬称略)



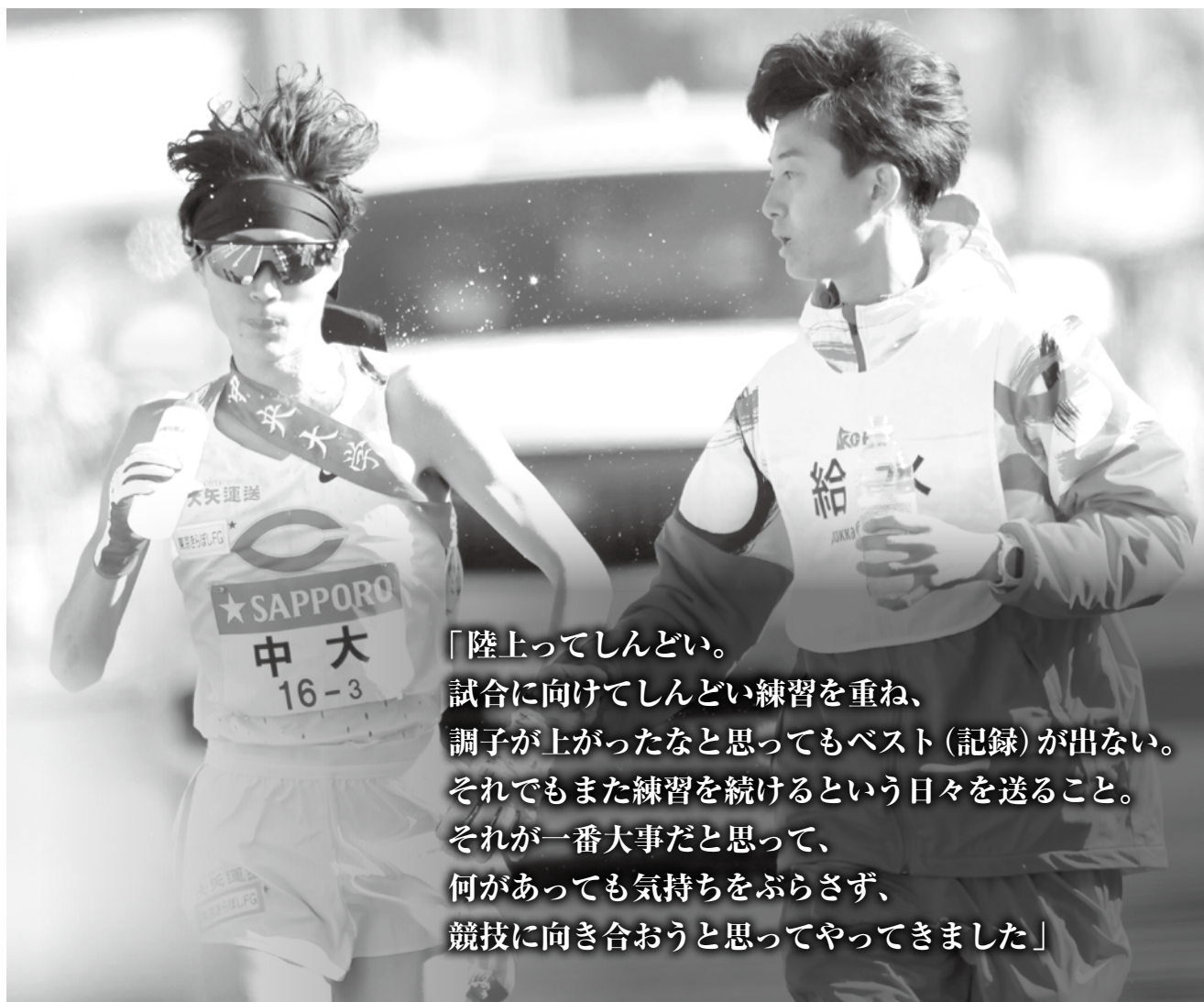
給水のため3区の本間颯選手(左)と並走する佐野拓実選手 ©Getsuriku

励まし合い、 刺激し合った同期との絆 かけがえのない財産

第101回箱根駅伝 総合5位

陸上競技部
長距離ブロック

前駅伝主将 佐野拓実選手(経済4)



「陸上ってしんどい。
試合に向けてしんどい練習を重ね、
調子が上がったなと思ってもベスト（記録）が出ない。
それでもまた練習を続けるという日々を送ること。
それが一番大事だと思って、
何があっても気持ちをぶらさず、
競技に向き合おうと思ってやってきました」

©Getsuriku

2025年1月の第101回箱根駅伝で、中央大学は総合5位となり、翌年出場のシード権を獲得した。陸上競技部長距離ブロックの駅伝主将（当時）としてチームを牽引した佐野拓実選手（経済4）に今の心境を尋ねると、「目標（7位）以上の結果で、やってきたことが結実したという思いです」と振り返り、「中大は強いチームになってきている。中大らしい駅伝で、箱根の優勝を目指してほしい」と続けた。後輩の選手たちに真紅の襷^{たすき}を託し、佐野選手は門出の時を迎えた。

（取材は2025年1月30日、オンラインで行いました）

中大らしい駅伝

「サポートメンバーも本気で向き合って戦う」「泥くさく、一つでも上を目指す」。佐野選手は、「中大らしい駅伝」をそう捉えてきた。

「陸上は何があっても走ることに向き合い続けるのが大事。ちょっと練習して、すぐ結果が出るようなスポーツではない」と、競技の難しさをたとえる。チームスポーツとして志し、取り組んできた佐野選手にとって、駅伝はもちろん個人競技ではない。さらに、メンタルの重要性を次のように説明してくれた。

チームのために、メンバーから外れた同期のために、指導してくれた監督、コーチのために、お世話になった人のために、支えてくれた人のために——。誰かのために走るという思いは「自分の力以上の走りを生む」という経験を、高校（京都・洛南高）時代から、そして中大入学後も繰り返してきた。

背中を押してくれた恩師の言葉

「（京都の）親元を離れ、東京で4年間、寮生活を送る。厳しい練習の先に箱根がある」。そう覚悟を決めて、中大に入学したが、陸上を始めたきっかけであり、夢でもあった箱根への出走は4年間、叶わ^{かな}なかった。2024年12月、箱根のエントリーメンバーに入れないとわかったとき、厳し

い現実に一人きりで考え込むこともあった。しかし、キャプテンとして、部員として下を向いたままではいけない。

「ここまで頑張り続けたキャプテンとしての佐野の人望、人柄を（チームの皆が）評価してくれていると思う。最後まで頑張り続ければ、走る10人はきっと、佐野のことを思って走ってくれるぞ」

電話で報告し、相談した中学時代、高校時代の恩師の言葉が背中を押してくれた。その言葉に感謝の気持ちがわいた。夢は果たせなかったけれども、前を向くことができた。

苦しく厳しい経験…成長できた一年

駅伝主将を務めることができて本当に良かったと思っている。自身の走りや結果でチームを引っ張れなかったという思いは残る。しかし、「思った以上に苦しく、厳しい一年だったけれど、周囲に支えられて成長できた」と感じているからだ。

社交性豊かで「人と話をするのが好き」という性格から、「どういうことを思い、考えているんだろう」と後輩たち一人ひとりと向き合ってコミュニケーションを取り、考えを共有するように心がけてきたという。後輩たちにもあきらめない姿勢や、泥くさく、ひたむきに競技に取り組む姿勢を見せられたと信じている。

駅伝主将に決まったとき、元主将の井上大輝選手（2022年卒、現大阪ガス）、前主将の湯浅仁選手（2024年卒、現トヨタ自動車）にかけられた「主将の経験は佐野自身を強くしてくれる」という言葉どおりの濃い一年だった。

佐野選手をはじめとする現在の4年生は、エース格の選手が名を連ねた1学年上、1学年下の世代に挟まれ、「メンバーに入れない選手が多い学年で、厳しい競技生活を送った世代」だった。しかし、同期生が刺激し合い、最後まで頑張ろうと励まし合って突き進めたことが「大事な財産になった」という。そして「同期との絆が深まりました」と笑顔を見せた。

「チームの皆のおかげで頑張れた」。佐野選手は感謝の思いを胸に卒業していく。



◆ Profile

佐野拓実選手

さの・たくみ。京都・洛南高卒、経済学部4年。長距離ブロック・前駅伝主将。179センチ、58キロ。自己ベストは5000メートル14分13秒04、10000メートル29分17秒39、ハーフマラソン1時間03分25秒。第101回箱根駅伝では3区、7区で給水を担当した。卒業後は一般企業に就職し、競技の一線からは退くという。

★第101回箱根駅伝(2025年1月2、3日)

中央大学 区間記録

	選手名	学部学年	記録(時・分・秒)
1区	吉居 駿恭	法3	1・01・07 ① = 区間賞
2区	溜池 一太	文3	1・06・39 ⑨
3区	本間 颯	経済2	1・00・16 ① = 区間賞
4区	白川 陽大	文3	1・02・03 ⑨
5区	園木 大斗	法4	1・11・43 ⑥
往路2位=5時間21分48秒			
6区	浦田 優斗	経済4	58・49 ⑥
7区	岡田 開成	法1	1・03・07 ⑦
8区	佐藤 大介	文1	1・09・51 ②⑩
9区	吉中 祐太	文3	1・09・46 ⑧
10区	藤田 大智	文2	1・09・28 ④
復路13位=5時間31分01秒			

総合5位=10時間52分49秒

※丸数字は区間順位





チアリーディング部のメンバーたち

夢だった 箱根駅伝の応援 チアの4年生も感無量でした！

応援団チアリーディング部・「HAKUMON Chuo」学生記者 谷井花蓮(総合政策4)

箱根駅伝を走る選手たちを間近で応援した応援団チアリーディング部の一人で、「HAKUMON Chuo」学生記者の谷井花蓮さん(総合政策4)が、応援団の思いを寄稿しました。

真紅^{たすき}の襷をかけ、総合5位に輝いた陸上競技部長距離ブロックの選手たちを、中央大学応援団チアリーディング部の一員として間近で応援できたことをとても光栄に感じています。応援団は毎年、往路の1区、5区と復路の6区、10区で2日間にわたり、応援の活動を行っています。

1区の吉居駿恭選手が先頭で飛び出したときは、応援団や沿道の周囲の観客から歓声が上がりました。吉居選手の走りは、ほかの選手に勇気と活力を与えていたと感じました。往路は大手町を応援団専用バスで出発し、テレビ中継を見ながらの移動でした。5区の芦ノ湖畔の応援場所に到着するまで中大の襷が上位でつながり、バス内也非常に盛り上がっていました。

2024年12月の壮行会や記者会見で、5区の園木大斗選手の「箱根を走るために1年間卒業を延期した」という熱い思いを聞きました。より一層応援に熱が入り、往路は2位という素晴らしい結果になりました。私たち応援団も復路に向けて、高揚感に包まれました。

復路の朝は、宿泊先を6時前に出発し、山下りの6区の応援場所に向かいます。着いたときは、すでに大勢の観衆がスタート地点付近や沿道を埋めていました。私たちも応援準備をはじめ、選手が目の前を通るのを待ちました。復路6区の1位校のスタートは8時、その後、往路のタイム差の順に選手が走り出します。

トップの青山学院大の選手を追う中大の浦田優斗選手の姿を、一瞬でしたが見ることができました。必死に前を追う力強い走りだと感じました。すぐ後ろから迫る駒澤大の選手との差もあまりないように感じて、駆け抜けていく浦田選手の方に向かって、必死に応援した記憶が残っています。

大手町に移動する復路のバス内では、優勝争い、シード権争いを映し出すテレビ中継にくぎ付けになり、中大の選



谷井花蓮さん

手はもちろん、全ての選手が無事に走り切るように願わずにいただけませんでした。

10区の選手たちを待つ大手町は、大勢の観衆が道路を埋め尽くしていました。一年に一度、伝統の箱根駅伝を大勢の人が心待ちにし、本当に愛されている大会であることを肌で感じました。

選手がこの日のために準備し、大きなプレッシャーの中で、懸命に前を向いて走る姿は魅力的で、応援したくなる理由の一つだと思います。私はとくに、中継所で襷をつなぐ仲間の姿が見えたとき、選手が笑ったり、ほっとした表情に変わったりする瞬間が好きです。

私は4年生で初めての箱根の現地応援でした。選手たちの真剣な表情やまなざしを感じ、緊張感の張りつめた間近

で見た駅伝はひと味違いました。選手たちは、チームメイトや支えてくれた人、応援してくれている人などのさまざまな熱い思いを背負いながら前に進んでいる。そんなことを感じました。

3カ月前の予選会から始まった箱根への道。私と同じ4年生がチームを引っ張り、目標の7位を上回る成績を収めてくれて、何よりうれしかった。選手一人ひとりが力を出しての堂々たる成績。1～3年生の下級生も活躍し、翌年もとても楽しみです。

結びに、ずっと夢だった箱根駅伝の応援に連れていってくださった陸上競技部長距離ブロックの皆様と、応援団の活動を支えてくださった皆様に感謝を申し上げます。



4度目の 学生日本一に 歓喜の涙

2015年度以来のインカレ制覇 準々決勝で難敵退ける スケート部アイスホッケー部門

◆ Profile

種市悠人主将

たねいちゆうと。北海道・武修館高卒、総合政策学部4年。
170センチ、71キロ。ポジションはフォワード（FW）。父や
叔父の影響で4歳の頃からアイスホッケーを始めた。ハード
なプレー、クイックシュート、巧みなスケーティングが持ち味。

スケート部のアイスホッケー部門が2024年12月の第97回日本学生氷上競技選手権大会（インカレ）で優勝を飾った。一番の強敵とみられた東洋大に準々決勝で競り勝ち、2015年度以来9大会ぶり（93回大会はコロナ禍のため中止）に頂点に駆け上がった。大会の最優秀選手に選出された種市悠人主将（総合政策4）、ポイントゲッターとして活躍したフォワード（FW）の堤虎太郎選手（同）に喜びや今後の抱負などを聞いた。

（写真は全てスケート部アイスホッケー部門提供）

一番の目標を達成 頑張った成果に安心感も

「一番の目標だったインカレ優勝。達成感を覚えました」
決勝の残り10秒、種市主将は勝利の瞬間を待ちきれなかった。ベンチで戦況を見守っていたが気持ちが高ぶり、リンクに飛び出して仲間の歓喜の輪に加わった。

前日の準決勝（関西大戦）の第1ピリオド、開始数分で氷上に倒され、後頭部を打ち脳しんとうと診断された。これ以降、ベンチで見守るしかなかった種市主将だが、「体を張って相手にぶつかってってくれた」と、チームメイトの気迫あふれる戦いぶりに感謝した。欠場せざるを得なかつ



2015年度以来のインカレ制覇を喜ぶ選手たち

◆ Profile

堤虎太郎選手

つつみ・こたろう。名古屋市出身。北海道・武修館高校卒、総合政策学部4年。173センチ、73キロ。ポジションはフォワード（FW）。父の影響で5歳から競技を始める。がむしゃらなプレーが持ち味。コーナーバトルでバックを奪われない技術力と突破力、スピードにも自信がある。

た決勝は医師やコーチに氷上に出ることを止められていたが、気づくと駆け出していたという。

堤選手は「(優勝は) すごくうれしかったけれど、1年間頑張った結果が出て、安心もしました」と振り返った。事実上の決勝といわれた東洋大との準々決勝を制し、さらに自信と弾みをつけて、準決勝、決勝を快勝した。

準々決勝の終了間際、堤選手は、同じセットでプレーするFWの夏野晃輔選手（商4）が氷上で勝利を確信して号泣する姿に、「もらい泣きしそうになった」という。

熱いタイプだが、普段はクールだという夏野選手を含め、中大から5人が大会のベスト6に選出され、チームの選手層の厚さ、レベルの高さも証明した。

「氷上の格闘技」激しいコンタクト

種市主将、堤選手の2人は同じ武修館高校（北海道釧路市）を卒業し、中大に進学した。氷上で計7年間、同じチームでプレーをともにした仲で、息はぴったりだ。インカレを含む試合で、同じセットではプレーしていないものの、堤選手は副主将として種市主将を支えてきた。



「氷上の格闘技」とたとえられるアイスホッケーは、原則として選手交代は自由で、攻守の切り替えや展開の速さ、スピード感が魅力でもある。ヘルメットやグローブ、フェイスマスクなどの防具で体を守っているとはいえ、フィジカルコンタクトが激しい競技だ。当然、選手の体のケアや体調管理も大切になってくる。

実は、堤選手も準々決勝で、テーピングをぐるぐる巻きにするほど右ひざを痛めた。準決勝の関西大戦は出場を予定していなかったが、チームは第1ピリオドに0-1と先制を許してしまう。第2ピリオドに志願して出場した堤選手は2得点の活躍を見せ、逆転勝ちに貢献した。

クリエイティブな攻めのホッケー

中大のアイスホッケーは「クリエイティブな攻めのホッケー」(種市主将)で、創造性や意外性のあるプレーが特長だという。ただ、選手たちはタレントぞろいでも、「自分勝手にプレーするのではなく、チームのために個人技を発揮

する」(堤選手)という姿勢を貫いている。だからこそ、「中大のチームでプレーするのは楽しい」(堤選手)という思いも生まれてくる。

中大で過ごした4年間で、2人ともアスリートとして成長した。種市主将は「フィジカル面の成長で、試合で当たり負けはしない。スティックのしなりを使って崩れた体勢からでもシュートを打てるようになった」と胸を張る。

堤選手は、OBのプロ選手とともに筋力トレーニングに力を入れ、「プレーの幅が広がった」と語った。2年生の夏から3年生の3月まで米国ジュニアリーグのチームへの留学も経験している。

種市主将は卒業後、一般企業で仕事に就く一方で、アジアリーグアイスホッケーに加盟するプロチーム、横浜グリッツに所属する。堤選手は米国留学で1年間休学した経緯があり、2025年秋以降のプロチーム所属を目指している。2人がいずれは日本代表選手として世界選手権、五輪などの世界の舞台で活躍する姿を期待したい。



フォワード 3 選手&ディフェンダー2選手で1組のセット ローテーションで交代、スピーディーな展開生む

アイスホッケーは、硬質ゴム製の円柱状のパックを打ち合い、相手方ゴールに入れた得点を競う。1ピリオド20分の3ピリオド制。氷上に一度に出場できるのは、ゴールキーパーを含む1チーム6人まで。一部の判定でプレー停止中のときを除き、選手交代は自由にできる。

フォワード (FW) 3選手とディフェンス (DF) 2選手の5人1組を「セット」と呼ぶ。全速力でプレーするためスタミナの消耗が激しく、各チームが複数のセットをローテーションで交代させてゲームが進む。頻繁に選手交代することで、スピーディーなゲーム展開が生まれる。

第 97 回日本学生氷上競技選手権大会 ファーストディビジョン

(2024 年 12 月 24 ~ 29 日、青森県八戸市・
テクノアイスパーク八戸、FLAT HACHINOHE)

〈1回戦〉中央大 13 - 0 八戸学院大

〈2回戦〉中央大 25 - 0 東海大

〈準々決勝〉

	1P	2P	3P	計
中央大	3	1	1	5
東洋大	2	1	0	3

(中大得点者) 角丸陸斗2、夏野晃輔、小岩獅竜、種市悠人

〈準決勝〉

	1P	2P	3P	計
中央大	0	5	1	6
関西大	1	0	0	1

(中大得点者) 堤虎太郎2、高崎泰成、小岩獅竜、夏野晃輔、
下坪久晃

〈決勝〉

	1P	2P	3P	計
中央大	1	4	3	8
明治大	0	2	1	3

(中大得点者) 夏野晃輔2、角丸陸斗2、大野将輝、辻崇太郎、
小岩獅竜、藤間航哉

〈最優秀選手賞〉

FW 種市悠人選手 (総合政策4)

〈大会ベスト6=中大から 5 人選出〉

GK 川合温大選手 (文3)

DF 大野将輝選手 (商4)

FW 堤虎太郎選手 (総合政策4)

FW 角丸陸斗選手 (国際経営3)

FW 夏野晃輔選手 (商4)

(注) 記録、成績は日本アイスホッケー連盟サイトより抜粋

最上級生としてチームを牽引 心から感謝

学友会体育連盟スケート部監督 八戸了

第 97 回日本学生氷上競技選手権大会での優勝おめでとう。スケート部にとっては 9 年ぶり、97 回の歴史の中で 4 回目の学生日本一の栄冠を獲得することができました。

今シーズンは、種市主将の強力なリーダーシップのもと、「日本一になること」を目標に掲げて始動しましたが、春大会・秋リーグではこ一番で勝利を手にすることができず、歯がゆいシーズンを過ごしてきました。12 月の全日本選手権では、トップリーグのチームと互角に渡り合い、負けはしたものの自信を深め、集大成のインカレではチーム一丸となり、厳しいゲームを勝ち切ることができました。

日本一までの道のりには紆余曲折あり、美談ばかりではなかったけれど、最上級生としてチームを牽引し、その姿を見て下級生も一丸となって戦ってくれたこと、最後はしっかりとチームをまとめてくれたことに心から感謝しています。

新たなステージに向けて船出の時が来ましたが、最初は戸惑うことも、失敗することも、悩むこともあるでしょう。時に落ち込むこともあると思いますが、どんな時も「前向き」にチャレンジする気持ちを忘れないでください。何事も「前向き」に取り組んでいれば、自ずと道は開かれていくと私は信じています。これからの益々の活躍を祈念しています。



「やらない後悔より、やる後悔」「自らの選択を正解にしていく」 2つのモットーを胸に成長していきたい

海老澤英奈(文4)

「大学時代は人生の夏休みである」

こんな言葉を聞いたことがある人も多いのではないだろうか。今までの小中高校と違い、「やらなくてはならない」が「やらなくてもいい」に変わる大学生。自由に使える時間が増え、自分次第で有意義にも無駄にもなる、まさに「夏休み」である。

そんな大学生活を送るにあたって、大事にしていたモットーが2つある。

一つ目は「やらない後悔より、やる後悔」である。

私は好奇心旺盛な方で、関心のある分野が幅広い。この性格を大いに生かし、なんでもとりあえず行動に移すことを大切にしたい。

私はさまざまな学問を総合的に学ぶことが目的の文学部「学びのパスポートプログラム」に所属している。ゼミに入る学生は少ないが、私は1、2年生の授業を通して「社会調査」に興味を芽生え、ゼミに入って探究したいと思うようになった。自分から行動を起こして、教授や学部事務室に勉強したい旨を伝えにいき、ゼミに入るために自ら履修すべき授業を相談し、聴講もした。その結果、熱意が届き、無事に3年次から始まるゼミに入ることができた。

学業以外では、白門祭実行委員としても活動した。一番印象に残っているのは、有志のチームに所属し、デジタルチケットのシステム作りに携わったことだ。前例のない制度に戸惑いながらも、来場者が問題なくチケットを運用できるよう、夜な夜な協議を重ねた。当時の私は、何千ものデータをさばく技術がなく、データ処理に悪戦苦闘したが、仲間に助けられながら乗り切ることができた。

行動を起こすには勇気が必要だが、挑戦し、経験やスキルを得

たことが自信につながる。そこで出会えた人や考えが何にも代えがたい財産だと今では実感している。

もう一つのモットーは「自分がした選択を自分自身が正解にしていく」である。

基本、自分の選択を後悔することはないが、まれにメンタルが後ろ向きに傾いたとき、ほかの選択を取っていたらと思うことがある。そんなことを考えても過去には戻れないし、今の選択がほかより悪かったと証明する手立てもない。

ならば、選択した当時の自分を信じて、この選択をより良いものにすることが今の自分ができる最善なのではないか。そう思うことで、選択することが怖くなくなった。ゼミも白門祭実行委員を経験した選択も、今でも正しかったと思う。

今後「やって後悔」することがあっても、その経験で得られたことはきっと自分の大きな財産になると信じ、選択を単なる間違いにしないようにしていきたいと思っている。

卒業し、社会人としてたくさんの壁にぶつかったとしても、この2つのモットーを胸に、自分のペースで成長していきたいと思う。

私の大学生活は、自分自身にしっかりと向き合うことができた有意義な「夏休み」になった。



「自分らしさを忘れず、自分のペースで頑張る」 一番の良き理解者の母親に感謝

Q 中央大学ってどんな大学でしたか

海老澤英奈さん 私にとっては居心地のいい大学でした(笑)。学生数は多いけれど、(多摩キャンパスは)自然豊かな立地で広いということもあり、静かに作業ができる空間が存在するのが個人的には合っていたと思います。

Q 一番お世話になったと感じる人へのメッセージを教えてください

海老澤さん 大学関係ではないのですが、やっぱり母ですね。一番の良き理解者です。くだらないことや悩みごとを聞き、時にはアドバイスをくれて、勇気づけてくれてありがとう。これからも末永くよろしくお願いします!

Q ほかの卒業生にメッセージをお願いします

海老澤さん 皆さん、ご卒業おめでとうございます! 授業や安野智子先生のゼミ、白門祭実行委員会など、私に関わってくださった皆さん、大変お世話になりました。「これからも海老澤と関わっていいよ」という方!! とってもうれしいので連絡ください!

Q もう一度、中大1年生に戻れるとしたら、どんな活動をして、どんな4年間を過ごしたいですか

海老澤さん スポーツ系のサークルに入りたいです! スポーツ自体が好きなので、大学生のうちどのような形であれ、携わりたかった。あとはもっと率先して他学部の授業を履修したい。留学もありですね!

Q 10年後の自分をどんなふうに想像していますか

海老澤さん 社会人として経験を積み、人間として成長していきたいですが、基本は今と変わらないと思います。自分らしさを忘れずに、自分のペースで、自分なりに頑張っているのではないのでしょうか。



ゼミ長、学生記者…精いっぱい活動 「置かれた場所で咲く」自分と向き合った4年間

近藤陽太 (経済4)

1年間の浪人生活を経て、さらには第1志望の大学に不合格となった末に中央大学に入学した。思い返せば、高校、浪人時代の私は人生への当事者意識が欠如していた。高校時代は成績の悪い現状から逃避し、のりくくりと生活した。浪人し、予備校に入っても勉強には身が入らなかった。

しかし、大学入学に際し、この4年間で自分に向き合なれば、これから先の人生を空虚に過ごすことになるかと危機感を覚えた。「置かれた場所で咲きなさい」という言葉があるように、第1志望でなくても、中大の“雰囲気”には気に入るものがあつたし、ここで精いっぱい頑張ってみようと思ひ、大学生活をスタートさせた。

私が大学生活でこれだけは頑張ろうと思ひ、決意したことはゼミ活動だ。大学生の勉強といえばゼミが思ひ浮かんだし、同じ仲間と3年間勉強できるところに魅力を感じた。入ったのは経済学部の佐藤拓也先生のゼミ。ここに入つた理由はテーマ設定が自由で、研究したいことが定まっていな私にとってはうってつけだったからだ。

ゼミでは班活動で論文を執筆して、討論大会やプレゼン大会に出場し、仲間とゴールに向かう楽しさや難しさを知つた。たくさんの個性的な友人にも出会うことができ、取るに足らな話題で酒を酌み交わしたのも良い思い出だ。ゼミ長も務め、集団をまとめる難しさを知つた。うまくいかないことも多かつたが、必ず将来に役立つ経験を得たと確信している。

卒業要件ではない卒業論文も絶対に書こうと思ひ、決めていた。4カ月間、コツコツと綴つた野球と鉄道会社に関する論文は、佐藤先生に推薦をいただき、学部の優秀論文集に掲載されることになった。頑張ろうと思ひ、決めた取り組みで最後に大きな結果を残すことができ、とてもうれしかった。

もう一つの思い出は、「HAKUMON Chuo」学生記者としての活動だ。コロナ禍で思ひ描いていた大学生活を送れていなかつた1年生の私は、大学時代に何か形に残る活動を探していた。そんなときに学生記者募集の告知を見つけた。大の野球好きである私は、プロ野球ドラフト会議の取材ができるという触れ込みに誘われて応募した。そして3年間の学生記者の活動で、2度もドラフト1位指名の瞬間に立ち会えたことは、感無量の貴重な経験となつた。

ひいきの中日ドラゴンズから中大選手の指名がなかつたのは心残りだが、それは今後に期待することにしよう。ほかにも箱根駅伝やサッカーなど数多くの中大生を取材することができ、刺激を受けることが多かつた。取材を通してコミュニケーション能力が身についたり、記事執筆で文章力が鍛えられたりと、就活や社会人としての今後に役立つに違いない活動で、スキルを身につけながら、母校への誇りも育める素晴らしい経験だった。一步を踏み出して活動して良かったと思ひ。

4年間でわずかながらも成長できたように感じているのは、間違いなく中大で学び、さまざまな活動に積極的に取り組んできたからこそだと確信している。中大には自分を成長させられる素晴

らしい環境があつた。後輩たちもこの環境をぜひ存分に活用して、自分が思ひ描く「何か」を実現させてほしいと思ひ。そして、ありがとう！中央大学！



Q&A

「居心地の良い大学」 「先生のような格好いい大人に」

Q 中央大学ってどんな大学でしたか

近藤陽太さん キャンパスや学生の雰囲気が穏やかで居心地の良い大学でした。東京で肩肘張らずに過ごせる大学は少ないと思ひ、上京してきた私にとって最高の環境でした。

Q 一番お世話になつたと感じる人へのメッセージを教えてください

近藤さん ゼミの佐藤拓也先生(経済学部教授)です。先生のゼミで学び、皆さんの力をつけることができました。先生みたいに格好いい大人になれるように頑張ります。ありがとうございました！

Q ほかの卒業生にメッセージをお願いします

近藤さん 中大で関わつてくれた全ての人に感謝しています。会う機会が少なくなつてしまつた人もいますが、皆さんお元気で、また会いましょう！

Q もう一度、中大1年生に戻れるとしたら、どんな活動をして、どんな4年間を過ごしたいですか

近藤さん 高校時代の部活動だったハンドボールをサークルで続けたいです。

Q 10年後の自分をどんなふうに見えていますか

近藤さん 家庭を持てていたらいいと思ひます。あとは出世したいです！(笑)



挑戦する勇気が自分の価値、財産を育む より自分を理解し、好きになれた4年間

島田莉帆 (文4)

不安を抱えて中央大学の門を叩いた4年前。4年後に自分が広報誌の記事を書いていることなど1ミリも想像していなかった。大学生活を経て、今言えるのは「この4年間で自分をもっともっと好きになった」ということである。何が私をそうさせたのか。1つ目は学生記者の経験とSNS運用の仕事。2つ目は家族である。

大学生活にも慣れ2年生に進級したのを機に、私は将来について考えるようになった。なんとなくメディア系の仕事がしたいと思っていた夏休みのある日、「HAKUMON Chuo 学生記者募集のお知らせ」というメールが目に入った。

「これだ!」と思った。ただ、そのときの私は自分に自信がなく、応募するかどうか、とても迷った。本当にやりたいか、自分にできるのか、いろいろなことを悩んだ。母に相談したり、何日も悩んだりした末に、勇気を振り絞って応募した。無事に学生記者となり、活動をスタートさせたとき、勇気を出して挑戦して良かったと心から思った。

2年生の冬にはファッション誌のSNS運用のアルバイトを始めた。学生記者になったときに感じた「勇気を振り絞った先にある、楽しくてワクワクする未来」を思うと、アルバイトには悩むことなく応募できた。選考を受け、仕事を始めることができた。これが今の私を形成する大学時代最大のターニングポイントとなった。仕事をする上での人との関係性の作り方、コミュニケーションの取り方など社会人としての振る舞いや、Webコンテンツの作成スキル、SNS運用のノウハウなどを学んだ。

一番大きかったのは、将来になりたい自分と就きたい職業の乖離かいりがなくなり、思い描く未来に統一感が生まれたことである。挑戦

することの大切さ、勇気を出した一歩が自分の価値・財産となっていくことを学んだ。

2つ目は、これまで生きてきた中で一番、家族と共に過ごす時間の長かった学生生活だったため、自分自身を深く知ることができたことだ。母と2人で旅行に行ったり、父や弟と深く語り合ったり、祖父母の家の畑仕事の手伝いなどをした。

こうした家族と過ごす時間で、「私が私をより理解し、好きになる」ための要素を得た。自分を好きになることで、周りの人のこともより好きにより大切にしたいと思えた。かけがえのない時間だった。たくさんの言葉を交わすことで、家族でさえもこんなに考え方、価値観が違うのだと改めて気づき、もっと人と会話をし、さまざまな考えを共有したいと思うようになった。

この2つのことから、私の4年間は自分自身を理解できた非常に貴重な時間だった。これからはこの4年間で知った自分の個性を生かしつつ、社会人として多くの人と交流することでそれを磨き上げながら、誇れる自分として生きていきたい。きっと希望や光だけでなく、壁にぶつかったり苦しむこともあるだろう。そんなときこそ自分自身の声に耳を傾け、この4年間で学んだ、勇気を出して挑戦すること、自分を見つめ直すこと、周りの人と会話をすること、これを大切にしていきたい。



「人思いの人が集まる大学」 学食「全メニューコンプリート」の野望は……

Q 中央大学ってどんな大学でしたか

島田莉帆さん 私にとってはオアシスでした。温かくてゆったりとした時間が流れ、ホッとした気持ちになりました。出会う人はみんな温かく親切で、「人思いの人」が集まる場所でした。

Q 一番お世話になったと感じる人へのメッセージを教えてください

島田さん 3年次から所属した考古学ゼミの小林謙一教授に感謝を伝えたいです。卒業論文の完成に向けてご尽力いただきました。考古学の基礎を学ぶとともに、夏休みに山梨県で2日間の発掘作業をしたことは貴重な経験となりました。丁寧にご指導いただき、本当にありがとうございました。

Q ほかの卒業生にメッセージをお願いします

島田さん 4年間、それぞれの時間を過ごし、それぞれの未来へと羽ばたきます。ぜひ未来が皆さんの思い描くものとなりますように。同じ中大卒業生として私も負けずに頑張ります。

Q もう一度、中大1年生に戻れるとしたら、どんな活動をして、どんな4年間を過ごしたいですか

島田さん 学食をたくさん食べ、中大のイベントにもっと参加したい。コロナ禍の時期に入学したということもあって、学食には数回しか行けなかった。「全メニューコンプリート」の野望があります!

Q 10年後の自分をどんなふうに想像していますか

島田さん 全く想像できませんが、理想はあります。悔いのない日々を過ごし、周りの人に感謝して寄り添える人であってほしい。今と変わらず笑顔を大切に、誰かに夢や希望を与えられる人であってほしい。





多様な考えを取り込み、人として成長 天田ゼミで社会学の学び

影原風音(文4)

「中大の文学部って専攻がたくさんあるから1つの学部で様々な分野を学べるのか、楽しそう。私にぴったりかも」と高校3年生の私は感じ、ここで学びたいと実感したことを今でも覚えています。好奇心が旺盛な性格で、何でもやってみようという考えの私は、大学は地元から出て多くのことを吸収し、将来は学んだことを還元して地元で働きたいと当時はぼんやりと考えていました。

卒業を迎えた今、当時の自分が思い描いた道のりが実現していることにとても喜びを感じています。大学生活は文字通り瞬く間に過ぎてしまいました。中でも私は天田城介教授のゼミで学んだことが強く心に残っています。

3年生の夏には熊本へゼミ合宿に行き、国立ハンセン病療養所菊池恵楓園や慈恵病院の「こうのとりのゆりかご(赤ちゃんポスト)」を見学し、熊本日日新聞記者の話の聴講、熊本市シルバー人材センターの会員へのインタビューなど盛りだくさんな3日間を過ごしました。自分の知見になかった考え方や生き方に触れることで、なぜそう考えるのかと人間の思考についてもっと知りたいと興味がわきました。

そこで私は卒業論文の執筆に際し、「人間の考え方」をテーマとし、人間が思考を形成していく背景と社会関係、他者との関わりの中で抱いた新たな感情に関してまとめようと考えました。

天田教授からの助言をいただき、染色体異常の病気であり、予後が短いという特徴から治療は施されない「18トリソミー」という病気を私は知り、この病気をもって生まれた女の子を育てるご夫妻にインタビューしました。2人の承諾を得て、卒業論文では実名で表記しました。

ご夫妻は18トリソミーという病気を全く悲観しておらず、落ち込んだり思い悩んだりもしていませんでした。私は、苦しんだ思いが忘却され、記憶が上書きされてしまったのではないかと考察し、誕生から時間の経過に沿って感情を探るようにインタビューしてみたものの、私の考察が遠く及ばないほどに両親は前向きに考えていました。

ご夫妻は「当たり前生きる3人家族」として歩んでおり、「いろいろな思い、悩みを経験している」というのは、私の思い込んでいた障害者家族の姿にほかならなかったのです。

「娘が楽しそうに生きているからそれでいい」「病気を障害と捉えるか否かはその人の考え方次第で決まる」というご夫妻の考え方に感銘を受けました。私の問いかけにも真摯に明るく答えてくださったことに深く感謝しています。

社会学を専攻し、他者のさまざまな考え方を受容できるようになり、人間の関わり合いを学ぶことができました。多様な考えを自らに取り込み、人として成長できました。天田ゼミの学びで、「ここでしかできない出会いと経験」をいくつもさせていただいたと強く感じています。中央大学で学びの機会を与えてくれた私の両親には感謝の気持ちでいっぱいです。



Q&A

多摩キャンパス、過ごしやすかった4年間 軟式野球部で3年生の夏に日本一を経験

Q 中央大学ってどんな大学でしたか

影原風音さん さまざまなコミュニティで活躍している人がたくさんいて、私も何かを頑張ってみようという刺激を受けました。静岡県から上京し、自然が豊かな多摩キャンパスは落ち着いた環境で、過ごしやすかった4年間でした。

Q 一番お世話になったと感じる人へのメッセージを教えてください

影原さん 3、4年生のゼミの担当教授である天田城介先生に大変お世話になりました。先生のもとで学んだ多くのことを忘れず、社会に生きる一員として活躍したいと思います。今まで本当にありがとうございました。

Q ほかの卒業生にメッセージをお願いします

影原さん ゼミ同期のみんな、今まで本当にお世話になりました。またいつか集まって、みんなが見ている景色について語り合いたいです！

軟式野球部同期のみんな、たくさんの思い出をありがとう！ 3年生の夏に日本一のチームとなり、一生忘れられない思い出となりました。

Q もう一度、中大1年生に戻れるとしたら、どんな活動をして、どんな4年間を過ごしたいですか

影原さん 私が入学した頃はまだコロナ禍で、サークル活動も規制のある中で動いていた記憶があります。ペDESTリアンデッキでいろいろなサークルが新歓で明るく声かけをしている風景に憧れました。

Q 10年後の自分をどんなふうに想像していますか

影原さん 地元のUターン就職先で先輩ができ、徐々にキャリアが軌道に乗っているのではと考えています。自らの行動が周囲に良い影響や刺激を与えられるような人間になりたいと思います。